

松原貴子, 沖田 実, 森岡 周(著)

ペインリハビリテーション

内山 靖

(名古屋大学医学部保健学科)

「痛みへの挑戦」を著した Merzack R は、第 I 部の冒頭で“痛みは生体に対する有益な警告としての反応である”と医療者が安易にとらえることに疑問を投げかけ、“末期がんの痛みは誰に対して何の防衛反応となるのであろうか”という Leriche R の言葉を引用し、痛みを対象者中心に様々な視点からとらえることを記している。

一昨年、厚生労働省は「慢性痛に関する検討会」を設置し、基礎医学、薬理学、麻酔科、産科・婦人科、神経内科、整形外科、膠原病、精神神経科、理学療法、看護を専門とする専門職に加えて、市民代表者を交えて集学的・全人的な議論を展開した。これまで、健康局疾病対策課では、“〇〇病に対する検討会”は数多く実施されていたが、症状を正面から扱うことは初めての試みであった。委員として参加した評者に対して、慢性痛に対する理学療法の役割として、①動作に対するアセスメント、②治療としての物理・運動療法、③行動変容と就労支援に対するリハビリテーションという役割が示された。このように、疼痛に対する理学療法へは大きな期待が寄せられ、その学問的・社会的な責任は大きい。

このような時期に、松原貴子先生らによって本書が上梓されたことは誠に喜ばしい。本書は 4 章からなり、痛みの基礎生理・神経科学、疼痛のメカニズム、

評価、既成概念から脱却したペイン・リハビリテーションについて分かりやすく解説されている。疼痛学にこだわらず、疼痛を有する対象者を基軸とした哲学と構成は特筆されてよい。日本の書籍らしく、章、節、項の階層性が明確に整理され、全体との流れと個別の論点を理解しながら読み進むことが容易である。同時に、各章を拾い読みしても全体の概念が理解できるように最小限の重複を許容した執筆スタイルは、読者を中心に据えた心配りである。専門領域は異なるが気心の知れた同志をもつ 3 人で執筆していることが内容の幅をひろげ、自由闊達な理学療法界の将来を明るく照らしているようにも思える。

評者の役割としてあえて課題を提示するならば、書籍の内容がタイトルに表しきれていないように感じる。〇〇リハビリテーションは最近の流行語のようであるが、冒頭でも記したように疼痛に対する理学療法への期待は多岐にわたり、もっと理学療法に自信と独立性を持つてほしいと思う一方で、リハビリテーションを語るのであれば多職種の執筆が適しているとも感じる。また、全く同じ表が掲載されていたり、意図しない重複や表記の違いを散見するため、さらに推敲と整合性を計ることを期待したい。

いずれにしても、疼痛を有する対象者の心身・活動・参加を真摯に理解しようとする挑戦的な内容は、多くの理学療法士や学生ならびに関係職種の皆様に手にとっていただきたい良書として、自信を持って皆様にお勧めできるものである。

●A5 判・412 頁

定価 4,410 円(4,200 円+税)

2011 年 三輪書店・刊